

### 第三回昭和女子大学児童文学賞選考結果

2009年度から創設された昭和女子大学児童文学賞は、若いみなさんにぜひ文学に親しんでいただきたいとの思いから、「あなたの夢や想いを童話というスタイルで表現してみませんか？」というキャッチフレーズのもと、全国の高校生を対象に、フレッシュな創作児童文学を募集しています。

選考委員は、坂東眞理子(昭和女子大学長)・茅場康雄(同日本語日本文学科長)・西本鶏介(同名誉教授・児童文学作家)・石井直人(同非常勤講師・白百合女子大学教授)・堀直子(児童文学作家)の5名です。

選考委員会を経て、最優秀賞に福田麻友子「セミと私の一週間」、優秀賞に市岡みずき「星の声」、佐藤希美「おやすみの前に」が決定しました。

#### 選評 選考委員 西本鶏介先生

近年、いわゆる成人文学と児童文学の領域がせばまりつつあります。題材やテーマにしても児童文学だからといって特別配慮することはありません。例えば小学生を対象にした「十二歳の文学賞」の入選作を見ても、これが小学生の書く作品とは思えない大人っぽいものもあります。ならば児童文学と成人文学の違いとはなんのでしょうか。大人だけではなく、まずは子どもの感性にいきいきと訴える文学であるという視点を忘れないことです。

福田麻友子さんの「セミと私の一週間」は、成虫になって、わずか一週間で死んでいくセミと十七年生きてきた「私」との対話を通して生きることの意味を誠実に問いかける味わい深い作品です。「私」のとるにたらない一週間でセミの充実した一生となり、「しあわせだな」と死んでいくセミの姿を見た「私」が生きている自分を実感するラストも説得力があります。できることなら日記スタイルでない書き方を考えてください。

市岡みずきさんの「星の声」はいささか感傷的で、文章に冗漫なところもあ

りますが、無口で心を開こうとしない弟をなんとか励まそうとする姉のやさしさがしみじみと伝わってきます。星のかがやく夜空を見せるために弟を原っぱへ連れて行き、「天の川のお星さまも、アカネたちの地球も、みんなギンガケイの家族なんだって」と弟にいい聞かせるところがお説教くさく見えないのも作者のあたたかな心を感じさせるからかもしれません。

佐藤希美さんの「おやすみの前に」はなんとか物語性のあるストーリーを書こうとする作者の姿勢を評価して優秀賞に選びましたが劇中劇ともいべき若者が竜退治に出かけるお話は類型的でつまらない。子どもの時に忘れたお話をどうして大人になって思い出したのかもわかりづらい。冒頭でも触れたように子どもの共感を呼ぶのは絵本を読んであげる母親の感慨なのではなく、未知の世界へ運びこんでくれるドラマチックなお話です。

選評 選考委員 石井直人先生

今回の選考を行なっていて、やはり、文章の感じというか、言葉を一つ一つそこに置いていく手つきというか、その繊細さが大切なのだと思ったのでした。奇抜なアイデアや高速のストーリーも重要だけれど、文学は言葉の芸術なのだから、決め手は、繊細な言葉の感覚なのではないか、と。

「セミと私の一週間」は、冒頭の「セミのフェイントが嫌いだった。」から勝利している感じです。言葉遣いの一種の「軽み」ですが、好ましく思いました。この作品のテーマは、セミの短命と人間の長命のコントラスト、死と生の哲学でしょう。これは、いわゆる重い問いです。また、セミの成虫の一週間に着目する話は、例えば三木卓の「せみとぬけがら」(『馬とつるくさと少年』)を初め、前例がいくつもあることでしょう。ですが、下手をするとテーマの重さに筆も重くなりがちなところをクールな「軽み」を手放さずに書いたことが成功したと思います。ラスト間近の「歩きながら、この一週間だけが、切り取られたように夕方に浮かび上がる。」という一文なども、印象的な言い回しだと感心しました。バランスの良い、完成度の高い作品だと思いました。

「星の声」は、これこそ、繊細な作品だと思います。静かな、そして、抒情

的な一編です。弟は、なぜ、いつも表情が動かないのか？ ところが曖昧にしか書かれていないという人もいるでしょう。ですが、「弟は一だから一なのだ。」といった外側からの言葉を貼り付けないところも、思想の繊細さに他なりません。日常の会話がそうですが、うまく言えなかったと思うと人はもう一度似たような言い回しをくり返して言い直します。文章も同じで、いちばんの山場で言葉を重ねて正確を期そうとしてしまいがちです。が、そうすると、速度が落ちてしまいます。太宰治が言っていたように思うのですが、迷った文章は消すべし、だそうです。説明的に説明するより、抒情的な場面をそのまま投げ出して、読者にゆだねてもいいのかもしれませんが。これからも書き続けて欲しい人だと思いました。

「おやすみの前に」は、まず、アイデア勝負かと思います。ベッドタイムの読み聞かせのお話のパターンを前半と後半で入れ換えてみせるわけです。男子の竜退治・宝探しの好戦的な物語とお姫様の偽装誘拐(?)の非戦的な事件と。このコントラストは、うまくいったと思います。でも、さらに注目しておきたいのは、それを「母親」「子供」といった突き放した言葉使いで語った点です。これによって、甘さの消去というか、語りの冷静さというか、距離感が生み出されています。こうした硬い言葉をわざと選ぶのも、繊細さゆえだと思うのです。ところで、母親は、お話を語り変えたことを「物語に対する冒瀆」だと自分を非難したわけですが、「冒瀆」だとしてもそうせざるをえない瞬間が訪れるという点に、この作品の深みがあるように思いました。

選評 選考委員 堀 直子先生

初めて児童向け小説を書いた、自分の十八歳の頃を思い出しながら、全作品を読んだ。今回全ての作品についていえることは、自己の内面に入っていくものが多かったと思う。自己を見つめ直し、生きる意味を探していくということになるのだろう。しかし、家族や友人、恋愛、将来への希望や不安、大人への憤りなど、高校生としての等身大の思いがきつとあったはずだ。高校生でなければ書けないもの。それをリアルに感じさせて欲しい。人は人の海にもまれて、

人の中で成長していくのだと思うから。そのときにしか書けない十代の心、十代の事件簿、いってみれば、等身大の青春をもっと描いて欲しかった。

一位の「セミと私の一週間」は、若い人らしい表現でまとまりもよかった。セミが「ぼくは生きているぼくは生きている…」と鳴くところ、妙に説得力があった。私は、セミと主人公の愛の物語として読んだ。

二位の「星の声」は、茜の姉らしい思いがこもった作品であった。素直な表現で読みやすかった。幼い弟に寄せる複雑な姉の気持ちを、星降る夜の中で、再認識する場面は、もっと書き足すべきではなかったか。

同じく「おやすみの前に」は、お姫さま、剣、竜が登場し、パターン化されてしまったのは否定できない。後半で、その種明かしがされるのだが、私はなぜか、母親の背景が知りたくなってしまい、童話としてまとめるよりも、もっと母親の内面を小説として描いたら、どうなるか？などと余計なことを考えてしまった。

選にはもれたが、破綻はあるにせよ、現代っ子たちを群像で描こうとした「真夏の未熟すぎる心境と感情」(応募規定は守ろうね)、「ゲーリンデ」の描写力に、同感する所が多かったことを付け加えておく。